

えびす信仰とえびすかき

人形芝居えびす座座長 武地秀実

民間信仰である「えびす信仰」は、いつごろからどのように広がったのかは明確ではない。宮本常一によると、エミシやエビスという言葉は古代（縄文時代）から日本に住んでいた狩猟や漁猟で暮らした力の強い人を表しており、かれらの神として日本各地にあつたとされる。時の勢力に組みされるように、「えびす神」は、出雲の大国主命の子である事代主命（ことしろぬし）か、もしくはイザナギ、イザナミの子である蛭子命（ひるこのみこと）となつていった。蛭子命とされたえびす神の本宮が西宮神社である。

「えびすかき」と呼ばれた傀儡師は、西宮神社の仕事を受け持つ下級神人であり、彼らが回した戎舞の冒頭が「西宮の福の神が舞こんだ。西宮の戎三郎が…」とあるように、西宮神社を宣伝するのが目的だったと言われている。えびす信仰が根付いていた地域を訪れ、西宮神社の御神札を配り、果たして西宮講社を拡げていった。それは関西を中心に愛知や長野、山形など中部から東北地方にまで及んでいる。

もともと戎舞は、漁民がえびす神に魚釣りを模倣させることによって大漁を予祝する呪術であり、それが芸能者（傀儡師）によって芸能化され、

そのユニークさから笑いを呼ぶ福の神に変化し、都市部では商売繁盛の神として親しまれていったと考えられる。傀儡師は芸能の神「百太夫神」を祀り、特に「えびすかき」は秀でた芸能の民であつたらしく、一五八八年には宮中にて上演したと御湯殿上日記に記されている。平安末期、今様の元祖と言われる傀儡女「宮姫」の母系でつなぐ四代目の名手は「四三」であり、一七二八年の西宮神社吉井文書によると、えびすかきの座元が「四郎三」を名乗っていることから、四三の流れを汲む名門の傀儡師であつたと私は想像している。

しだいに、ハレ（祭）の門付けを生業とするものや、芸能を生業とするものなど、「えびすかき」も形を変えていった。西宮神社からは明治十四年の吉田小六の上演を最後に「えびすかき」は姿を消したが、毎年一月五日に斎行される百太夫神社祭では淡路や徳島から「戎舞」が奉納されている。現在は徳島の「阿波木偶回しを復活する会」が、さらに二〇一一年からは「人形芝居のふるさとづくり」をテーマに西宮浜脇地域のまちおこしを目指して結成した「人形芝居えびす座」が平成のえびすかきとして上演している。



えびすかき「戎舞」



人形芝居えびす座（兵庫県）のみなさん



百太夫神社祭につめかけた人々



徳島のえびすさん（左から拝宮人形座、大谷旭源之丞座、勝浦座、徳島県文化振興財団の所有）